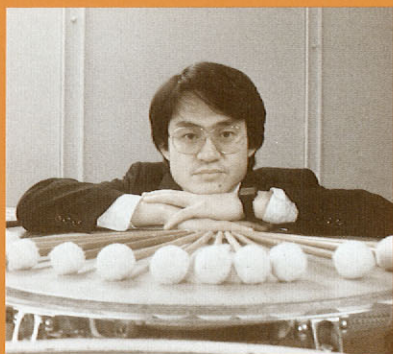


その土地、人々に密着し、 求められる、本物の音楽を。

音楽家 福田隆



熊本市生まれ、三十四歳、独身。
東京芸術大学音楽部打楽器科卒業後
フリーのパーカッション奏者として
東京を中心に活動。
昭和五十七年帰熊後は、
文化庁芸術祭熊本公演など、
地元でオーケストラの指揮と演奏活動が続ける。
昨年、県文化懇話会新人賞を受賞。
今後、熊本を舞台にした活躍が楽しみである。



**自分の本当の仕事と言えるのは、
何だろう。**

聞かれて困る事がある。「お仕事は、何をやってらっしゃるのですか。」——男である以上、仕事と言うからには、それに一生を捧げても悔いがなく、又、逆にそれによって過不足なく、生活して行けるものと思いたいのだが、現在の自分の立場を考えると、いつも複雑な気持ちにさせられてしまう。勿論、言葉を濁す訳には行かないので、できるだけ忠実に自分のやっている事を説明する……。「現在、熊本ユースオーケストラの指揮者をやっています。熊大フィルハーモニーオーケストラのトレーナーもやっています、時々、サマーコンサートや定期演奏会、演奏旅行等の指揮もします。熊大と熊本短大の非常勤講師もやっています、九州交響楽団のエキストラとして、定期演奏会や年末の第九にも出演しています……etc」。全部あげていたらきりが無い。説明しながら、果して、相手にこれが自分の仕事と言えるだけの説得力があるのだろうか、と考えてしまう。



じた次第。熊本には、本当の意味での音楽家という概念がない。音楽に関係する仕事は山程あるのだが、どれ一つとって、も、それだけで一生生活がなりたつというものは、なかなかない。本来、音楽家というものは、その土地、人々に密着し、求められなければ、存続できないものだから、熊本の本当の意味での音楽文化が豊かになる為には、人々の意識が高まらなければ、その道は、非常にけわしい。

**世界に誇れる、
県立劇場コンサートホール。**

県立劇場コンサートホールが、数年前

のサントリーホール等が話題になったが、それとて、県立劇場の影をうすくする様なものでは決してない。ただし、どれだけ熊民が、その事実を自分達の事として認識し自覚しているかということになると、もはや絶望的である。個人的意見だが、例えば、パイプオルガンを県立劇場に設置する、という当初の話が、万が一立ち消えになったとしたら、熊本の音楽文化に対する意識の低さを露呈する恥以外の何ものでもないと思う。

**大切なのは、
人間の生活感に根ざした音楽。**

現在熊本は、アマチュア音楽家の天国である。自分も、熊本ユースオーケストラで育ったので、その事自体否定するものではないが、ファーストフードや、スーパーマーケット的な発想で、音楽が生みだされる様になる事だけはさげたいと願うのである。人間の生活感や、ヴァイタリティーが欠けていては、マーケットにならんだ、とても便利なもの、というのと同様の世界を破る事は出来ない。現在日本の音楽文化の頂点とされている東京で、その様なことを望むのは、東京自体に、生活感が欠けている以上、不可能に近い。熊本では、まだまだ、その点で可能性を失っていない。熊本が近代都市として発展するのは、結構な事だが、もし文化を大切にしようと思うなら、今考えなければ、手おくれになる様な事が多く有る様な気がする。もちろん、それが杞憂である事を願ってはいるが……。

